

2. 河川利用及び河川環境の現状と課題

(1) 旧途別川

旧途別川上流では、養魚のための水利用があるが、優先整備区間において水利用はない。

猿別川合流点から千住14号橋までの区間は耕作地を貫流している。この河川はかつて蛇行していた途別川から切り離されて、河床勾配が1/2000程度の緩やかな流れとなっており、河床は砂・礫・泥で構成されている。

河岸は、カシワ、ヤチダモ、ヤナギ林が河畔林を形成し、川岸にはヨシやミゾソバが群生している。鳥類では、住宅地や農耕地に生息するヒヨドリやカワラヒワ、ヒバリ、ノビタキのほか、水域ではキセキレイやアオサギが生息している。哺乳類では、キタキツネなどが生息している。魚類は、上流においてサケの遡上が確認され、緩やかな流れの中でウグイ類、フクドジョウ、トミヨ属やスジエビなども生息している。

水質については、旧途別川は公共用水域における「生活環境の保全に関する環境基準」に基づく類型指定がされていないため、定期的な水質調査はされていないが、令和元年度に上流は千住14号橋、下流は相川20号橋で水質調査が実施された。調査結果によると、BOD（生物化学的酸素要求量）は上流千住14号橋地点で1.4mg/ℓとなっており、環境基準A類型（基準値2mg/ℓ以下）程度、下流相川20号橋地点で0.8mg/ℓとなっており、環境基準AA類型（基準値1mg/ℓ以下）程度の水質である。

このような現状を踏まえ、地域住民や関係機関との連携を図りながら、河川環境を保全していく必要がある。



▲千住6線橋より上流（上流部）



▲相川20号橋より上流（中流部）



▲猿別水門より上流（下流部）

(2) 茂発谷川

茂発谷川からの取水は、農業用水の利用がなされているが、これまでに渇水被害を生じた事例はない。

河川環境として、明倫川合流点から源流までの上流部は、周辺に農地やカラマツ植林地が形成されている。河床勾配は $1/50 \sim 1/100$ 程度であり、河道内に落差工が設置され、河床はブロックで覆われている区間が多い。魚類では、落差工の下流側に形成された淵で、石礫底の瀬などを利用するフクドジョウや緩やかな流れを利用するイバラトミヨ（トミヨ属淡水型）が生息している。植物では、ヤナギ類やケヤマハンノキなどの河畔林が分布し、林床にはヨシ類、アキタブキ、エゾイラクサが繁茂している。

西猿別橋から明倫川合流点までの中流部は、周辺に農地が形成されている。河床勾配は $1/90 \sim 1/130$ 程度であり、河床は砂礫で構成されている。河道内には落差工が設置され、所々に淵がみられるが平瀬状の流れが多い。魚類では、石礫底の瀬などを利用するフクドジョウ、ハナカジカのほか、砂泥の堆積している箇所でカワヤツメ属の幼生が生息している。

植物では、河道沿いにヨシ類やアキタブキが繁茂し、所々にヤナギ類がみられる。水際にはノダイオウなどが生育している。また、部分的に山付き部があり、ケヤマハンノキやミズナラなどが生育している。鳥類では、森林に生息するセンダイムシクイやシジュウカラのほか、原野に生息するアオジ、ホオジロなどが確認されている。

猿別川合流点から西猿別橋までの下流部は、周辺に農地が形成されており、河道沿いに家屋が点在している。河床勾配は $1/130$ 程度であり、河床は砂礫で構成されている。河道内には落差工が設置されており、平瀬状の流れが多い。落差工には魚道が設置されておらず、広範囲を利用する遊泳魚であるアメマスやサクラマス（ヤマメ）、エゾウグイはこの区間でのみ確認されている。植物では、主にヤナギ類の河畔林が形成され、林床にはヨシ類が生育し、水際にはノダイオウなどが生育している。鳥類では、草地に生息するノビタキやベニマシコなどが確認されている。

水質については、茂発谷川は公共用水域における「生活環境の保全に関する環境基準」に基づく類型指定がされていないため、定期的な水質調査はされていないが、平成 25 年度に西猿別橋付近及びホープランド橋付近において水質調査が実施された。調査結果によると、BOD（生物化学的酸素要求量）の最大値は西猿別橋付近で 0.8mg/l 、ホープランド橋付近で 0.6mg/l となっており、AA 類型（基準値 1mg/l 以下）程度の水質である。

このような現状を踏まえ、地域住民や関係機関と連携を図りながら、河道の連続性を確保し、河川環境を保全していくことが必要である。



▲新和橋より上流（上流部）



▲茂発谷第二号橋より上流（中流部）

(3) 糠内川

糠内川は現在のところ河川の水利用はない。

河川空間の利用としては、釣りを楽しんでいる姿がみられる。

河川環境として、中里橋から源流までの上流部は、周辺に農地が形成されており、一部には市街地が形成されている。また植林地としての利用も目立つ。河床勾配は 1/120～1/190 程度であり、河床は礫主体で構成されているが、舟越橋付近では岩床となっており、平瀬状で単調な流れが多い。魚類では、瀬や淵などに生息するサクラマス（ヤマメ）や石礫底の瀬などを利用するフクドジョウが生息している。植物では、河畔林が残る区間でヤナギ類やケヤマハンノキが生育し、河岸にはヨシ類などの草本類が繁茂している。

万代橋上流付近から中里橋までの中流部は、周辺に農地や植林地が形成されており、左岸側は山付きの区間が広がる。河床勾配は 1/120～1/150 程度で、河床は礫主体で構成されており、早瀬や淵など多様な流れが形成されている。魚類では、瀬や淵などに生息するサクラマス（ヤマメ）や石礫底の瀬などを利用するハナカジカが生息している。植物では、主にドロノキなどのヤナギ類の河畔林が形成され、左岸側の山付きにはハルニレが生育している。林床にはヨシ類、アキタブキ、エゾイラクサなどの草本類が密生している。鳥類では、河畔林にとまるオジロワシや、水面上を飛行するカワセミが確認されている。哺乳類では、林内の広い範囲でエゾシカ（足跡）やキタキツネが生息している。両生類では、河畔林内の水たまりでエゾアカガエルの産卵が確認されている。甲殻類では、山付き部の沢でニホンザリガニが生息している。

猿別川合流点から万代橋上流付近までの下流部は、周辺に市街地が形成されており、開けた環境となっている。河床勾配は 1/150 程度で、河床は砂礫で構成されており、瀬淵が形成されている。魚類では、瀬や淵などに生息するサクラマス（ヤマメ）や、ウグイなどが生息している。植物では、河道内にヨシ類やアキタブキ、オオイタドリなどの草本類が繁茂しており、猿別川合流点付近ではヤナギ類が生育している。鳥類では、水辺に生息するカワセミやイワツバメが確認されている。また、猿別川合流点付近ではタンチョウも確認されている。両生類では、山裾の水たまりにエゾアカガエルの産卵が確認されている。

水質については、糠内川は公共用水域における「生活環境の保全に関する環境基準」に基づく類型指定がされていないため、定期的な水質調査はされていないが、平成 27 年度に万代橋付近及び上五位川合流点付近において水質調査が実施された。調査結果によると、BOD（生物化学的酸素要求量）の測定値は万代橋付近で 0.8mg/ℓ、上五位川合流点付近で 0.5mg/ℓ未満となっており、AA 類型（基準値 1mg/ℓ以下）程度の水質である。



▲中里橋より下流（中流部）



▲万代橋より下流（下流部）

このような現状を踏まえ、地域住民や関係機関と連携を図りながら、河川環境を保全していく必要がある。